志道軒五癖論

三

へ13
1277
3

京都帝国大学附属図書館

志道軒五癖論 巻之三

中間乃論

見ることを先三の巻に志道軒が実録なる方の事所々洩れたるを拾ひて編むとぬ此巻ことは志道の第一向き見つるかきて大集なり——依て其の出来ざりて巻を分へる是は此後の全く志道の志なるを以て編まず片言たれい等の名とすることなるを以て

中間とは何ぞや五石千石とことなるつくるの民家千の五町家の大家今限何万石何千石の見物なる大名此事掃しなるぬ事なる有ることも見せ中間此丹なるべ——此中間は丹なることを意とする面白い

とけも理とつも多くてん想たい物の中といふ
ものを君子と貴美しきふ那と中那多人のやまとを
家はつまる事も少くふとも四十の年れ上ほど
家きんしなとをいふ見さしもなく孫は新
法をもとやきて家とはやとは第のちよ
人の間と男のつて城ぬるまとを見非も那
中新法とも孫とも嫁のてきは一年程を
男もとき目も先海ら松の事と十姉ふまを
とを成し事ら意ハ何きてもなけまをもよ
ましを死が者しなるる大らるあまをだまを海

て娘ふ田舎も寛先のでんもを豆腐をんを
外ろなけをとかく別甘ようきまるもの本膳
に平血ようきつて盛を鰐あるいハ大あちで
自料理の鍋やしを鉢盛をつきをつ娘時ん
分稱をかく別身まなるハ淮くをなを
下男をを隔しを事をあけまハ面ゆを方をつか
ぬ人本膳のちく様もくとくなるを見ろか
家を中宮の乙徒をを大ちを遣て芝居の舟
のを以事もぶん明んを好き浜平ちをつをを
ことを仕易以敢自事を大ちをたのを何を宮を

いふ意をもの、いきをとゝ八日和尚見る如て女の
事のもの〳〵と浮き時まゝの様もかく成つ
遊ふ〳〵ふ物花見や芝居の如くまた和尚を
しれもまるとゝ江戸も一つ出うけてはらんあまぞと
〳〵陸ゝ行る時ゝ事のやまもの慶〳〵
ゝそゝかゝ者ゝ花やゝなゝ者ゝ芝居ゝ江戸
物ゝ長男ゝ行ゝ者ゝ百日をゝゝ拾ゝ
ちやゝゝげゝ者ゝ商ゝ者ゝ
いゝ和意ゝかゝの八男ゝ拝ゝ
ゝゝゝゝ時ゝ仲

花の八百屋のゝゝくるん合ゝほゝのうゝ
ゝゝ男ゝゝ者ゝ女郎ゝ
ゝゝゝの花ゝ江戸の秋ゝ女
房ゝゝゝ者ゝ合ゝ八見ゝ
ゝゝのゝ鮮ゝ脇ゝ脇ゝ
関帳ゝゝゝゝゝ芝居ゝ
女ゝ事ゝゝゝ者ゝ
ゝゝゝゝゝ女ゝ男ゝ一ゝ大ゝ
ゝゝゝゝゝゝ者ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

きの好きは志ゆふともまハなまめかしく別のこ
とやさしき夫婦なかのなかも一生ふ文なぞ添ひとも
あまみきびしく物見遊山も一生出来ぬようなうす
まず海山も見ぬ身のむかし遊びの色つくはさぞかし
ことも何かとふじん形気ハ陣だんやす前の本え
あれ在所のあるつまをうし芝居見物て能
草形ハ世間気がめ娘子らしきがなまじ実られ
ぬれなどんごと出来もおおまかふやら役者まで見
色盛りのたまたまハ走付ぬら上手判よもまらい
女かあんかだけ又一生じまいともねえかの東西

志らぬぬしと浜子の色ふよいづれ年ろうもとなとも
そう云ふ花一八以くやうや山松の大臣の数
類ばかり東西へ流されしも八方庵の文字摩らう
くしい義気の何うち寺つやつやうしたとハ一生
はなあやまり見ご事一つへし世理ならばさくハ
かの山斗らし山とも高きあんすばかり近きわと
れとさら何よりもなお高きよふたまさか見つても油
取りたら取支ぬとへままほうぼうでも男ハ
一生志身ぬと以ふ好くちよつと都移の首よ
の〻存ても娘のかわる年ハ毎年しハへまごと出て

そこに女の者ども五位きつかつてゐるを何ものぞと
ふたつてハ年のほどハ廿ばかりに見へてかつ
ら川のあやのあきまきとかの形にきをつけられハ
姿も十四五ばかりにまさるくハたとへいとづきなとて
そこなる柏子に何ものぞとふやうに上にれ
雄君ハ男つきまひも発つてうるさく待れ
あつたこも六ヶ敷けきとゆ中のてゝいふ月姫んて
ハ男もまれ姫ん見ゆるてゝいとつても情なゝ
行しあぶふ山柏ハ人がこれ女ハ
も老ハまる女ハ浮達ゝとそこに

月の君双紙もかの春信が七様のうまん本ちも
つてまてゝ上ゝをしきあしたりゝ城ハらん柏せ
とゝ笑ゝとまを見きをけるゝ城上達ゝ形ゝ元
あけて一枚ゝ義明けて見るゝ見まゝ女ものぞ
きゝ迄ゝ弱の姫ゝ仏絶ゝくれゝる四ッ手
ゝ引組んて女の足ゝ空ゝもゝ男のゝゝ腰付
てゝ極んなき有きあのかゝゝ城ゝ名んハ男の方
まゝ元ゝ根まで入ゝゝ見てある
ハ女の方ゝ山ゝきゝのゝまゝとゝ城ゝ
ゝ書てあるゝハらん柏せ山ゝて馬鹿ゝ山ゝ

の書てあるを見て女あるふをえ
人を見るたうも哭て情をふなれて心
皆れるとくと下なぬらくそのそ
味新なる娘をも童のるくなるるるの
しかるわとみ若きうをけまつぐ女をあがが
来る年をふるそをふ上の根をのを見つる
まいもきるるまて正うそらい年を見てや
つまをも童のるくなる心の内てハとを程をみ
をふ根うをぬい いふを情るるや好をを
解して孤ふをつ つまをぬ義太までもかるる

とを流うを書て有たを根をふそををふ
常ふうを笑て童のるる所へのれ中上るを流
るをいをもうををを弘をのを流てのを書
たをうをハ空なををいをハ人をを身をれ
毎へ童をるをるをるなれい女のを流の書を
流をハ男をるだををふるをハ極ををたをを
一をん中るを内も女の系を城考へて見る時ハ世
量のををもあるをぬへ中関の海を右中大を限
比叡新の法新生をを云るを流のハをををハ
浦山寺の根をを形ををををを何をの和

こゝハけつく大名たちまち梅たのしみたん
ハせ屋敷をもち舟をもぶれとゝのうつゝあけ
何なりとも仕事ゆゑつまてハかの時ハ
ゝす大名の奥さまとゝもきさまへ抱きとゝも
呼れあんさんたん金づくてもれめもの飯屋の
内うゝでもたゝうふたとゝも有るまゝ九尺
店の鳥のゝちすも吸ものゝ男たらかゝも
きぐあんゝ出あのゝもゝゆゝものハ京もと京
けれ今ふとぎもへまれつまりゝむつゝ出ゝ
の仕事さあゝとゝたゝ飛あ前まの方ハけんふ

まゝ有ゝ時ゝ乗ゝ出て雨日ゝふまゝ
ふゝ上開ゝゝ中開ゝゝ女中ゝのゝま出
出ゝゝ城ちゝゝ中ゝ一ゝさゝ中屋ゝきの目飛
殿出ゝゝ廿七八の血達きゝんの行ゝゝきゝれ
廿八ゝゝき奥方ゝも那くゝとゝまゝ有ゝゝ流世屋
やゝお銭や伯父ゝの世ゝでお庭那を出ゝ
大名ゝ奥ゝ見の女中きゝゝゝ見出飛ゝ
ゝゝゝ記のゝゝ城きゝゝゝ出ゝ飛ゝ
の年ゝ世ゝ廿ゝゝ毎ゝゝゝゝゝ
ゝゝ年の世ん義ゝゝゝゝゝ先新ゝゝの

んだりも侍学生のやりくりハ角網工のかゝる
おもひよらぬく上承をたくふよふなくかゝれ
なきたのしきまれえて正の梅れあるゝかち
やきらかきハいかくべら世界のあんだりにえかゝ
ありたる席人も男ならぬて何所やらゝしい
し後て一志心のよかりもまいむしてヽ半月
何事申とえてもなしも春の末つらく老女
まつまて桜山まありまへかぬる夕またとを
奥さま八日朝の昼藤柿しきりとまた下駄よりて
庭の角池をもくまし花の名けまて葉のしぐさ

あちこちと梅見のうくまゝまをもしてまた城網く
開けて春見たりし花らうて後日頃ハ昼藤まて
一志心機けんの酥茶て奥方の良へかゝれ
かく庭へ去れとまても梅見すりの奥方の新て
まづそでら後つまきなりおきまのうきゝまて
中梅とまなる娘らげん来梅なるかまいめんりき
これをもむ花る娘かへ何を角日ぞ梅でもあるか
とえひあからの後下芝つとよまかる奥らハ何
いとしき梅を見ゆる坂本まつ何で口をきけ何
あらゝち去りもまる香かまへ後とまもまくもヽ

夏ころハ法殿つき兄の切義に付まいらせ候
半四郎兄さまなれども法全用に拵へしまいらせ
女子が第一事なれどもきかねバ二度と一箱参らせ
て後からぬつとお返しなされ候て其後のやうに
し続きづ立さまで下され城下にて其れく労
も初兄の程ハさま流さ入して以後の法事殿
此女内出此其ひも以ても本手が意なりて
かくのきさ形る曲をなれハ一生一度の事なれバ
其つらしき面白きハアリしとお礼を続いたし
つけまゐらせ候へ共其をつまらぬ事にまいらせ

なりまし此日形ハ為ニ托ら一箱を根さまへ
お返しくしとつき因まいらせ候ハ拵
其一段のくみる女へ来心よかなさけなくなされ
まゞらしきもまことやら言ふなれまあなふらも来
ありしやりつけあん其外事つかさ内
さとよふし半さまへ引てうるかうかと
つく置さまハ法殿つき兄の年時ハかなふ事
様のきた形にて来りしさまよき半なれハかし
きう斗あつくまさへ形をやけてまへ中開きまいて
ふらし以何事れなるハ都の海に留さまきと

さて女の風ぞくハ昔風にてちとおかしき所、
もあまた先輩このむらしきをさへ西女
がまさりたれども物ごし言葉ハいとやさしくて
なハらでぞかし殊にうつくしきハことのほかに
しげる也東山しき春の花新竹を出町の貝輪
そして嵯峨の法宮に祇園清水生まれて下は見
あきたれとも〇にも貝積自然の山ともとききさ
つゝく大坂などハまきしとしけるにさもあれ大坂と
ても京にくらべてハいつも若くきんなりて
若く年くハ松林山桂泉八条宮〇〇〇ん江戸

もちつて貢ろくに〇室附かすハ針附と夜たとへ
なき三ケ之津の女の風俗は一ツ二ツ色とへ
て以への

京

花ならバ月夜の梅の香奥ゆかしくこそあれ
おしむべくハおそ海根のさしみかたくるみひとむ
料理ならバ鯛の潮煮の酒ハ〇〇〇〇
如くうまきあまさ〇

江戸

花ならば垣根にまじる卯花さしかゝしきれ
中にまじりて以前もあれどきミしく下界にちるも
一真形の料理なりてハ鰹魚の色〇しく〇〇〇
中にハ味の〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇ハ辛子〇〇
〇〇けと〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

大坂

花ならは萩の〇〇〇〇〇〇目うつりして〇〇
〇〇〇〇〇〇〇料理ならバ〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇梅干〇

見ハ三ふ中国のあんだ以ちよつと平地也
なれど平野なれども国土少限と云て高地
ぞよ中国の飛切多くん三津まで平地
名ゐるき所かく別なれと大ゐの山系の高
いあんで生ゐるあうても生まつきの物こや
と云四ハ平国風のある物也岩しき多の
多くんうきまきハ国まらきれつつ
いしき数なんにちつて以口元ゐ出
やうべは有まるのと云ときれいふあり以ての
つきゐふ変ゆがゐまなまくハきまある

きまあ出まくも中国の極上平ハ三津のた
らゆくまは出所実出新出よたくてうけかと
以の平年ま書ゆきハ前ふ平ふ吉市れと金
ぶ不一ゆ

下国の論

ゐもや下国の云葉ハ下ゐ平ふ沢なれ市
も裏形き津孔ゐ沢やしき身の上も食の次
ての也ぞなれハ分有應の高も少額ぶの下流
緩こ布一の変俗でも高ゐを出かゐる如ぞハ所
ぞく上ゐ方ゐ平ふ以ま市あんだ以ゐんと見く

て五月を西一番に五人五人の法と唱へ
責らるるが多い度つゝ拍を京まで毎秋
く人数一月前の好人にも子の出来ぬ人
まれ河豚は夫より外にならぬ こゝろに拍子は多い
八月より貴賀神社非を以度と云て人数
の二番や汗輪を生の色は国果に業の色云ふも
都も以の中の国果にも冠を無き子は出来る
と云ふ也 八三中男に拍子のあるバ云そのまゝ
言ぬけて何の色しるし以外の面白き有て
殺掃も長ねけまと年子より出来るハ初人の国果

とあるてらく江戸に女のあると見こそりて
あゝ 勿体ない中りし人は出来るハ法屋利
様日茶子と申さるも出ぬ云ふ しるもふ
しても年なや子の出人の外竹田がちゝで
も以外ぬ度も一度子一人て子は出来る性も
有人なるも素人子筒るハ年子ても産れ
いそぶか拍子も多い子ふ子出るて
見試以て見試心て磯 以拍程子の多いハ
出来も使うある 故子見ても考人は加出ハ
拍年のそぶ意も拍子腐国ゝ考ハ古以ぶ下

此人までも下りて此人の身と来てかたんちき
立入ちを敲きを鼓隣し流方那く肌となる弐
去るゝつ以てせんてあつ光る事なれハ其の体
まで忍ふ形箱入へ立るゝ未右なり祢しれ
立入台つてあらん此悔たへをつまる也女ら一
入のあさら来て待らむ其の年へ那くまし付て
以達き古る肌を悪相るゝ以敲つ光へくも有
ふ乃まと来らもあれども持ら也づん立え事ゟ
てありし其も本る其まハ不思んきとも積具
其を重祢ゝやまもくりとをけつくる事ん者や有

へき悔くし　相此者ひとをとか洗湯て飛のまへ
庭去んゟ声を出して何え入てし　たれぞけ
ある事へおくしとなれと目旗右なとまいてお
どをつらん巨焼るゝ其らん法湯殿へ入るよふなれ
此は彼ゟ彼玉づん棒のやらのか之はづりと
之程らハ彼らハ忍まいらど深も思ふ仮なるのでせら
形似青以中で此に於て辛味敲ふ者もかく別ら
忍まふ者具なれハ悪相乎銘らたして気まけん
てハ有まれ上るハ評を付るがましハさらふ去る
物にて那し九尺程の二尺て程て取るあれ泣子

を抱きかゝへ屋外無後に二三人子供を孫らし
杖なんとも見えとのまゝにて閑の里なるを見るに
うち引出され壁へ足かゝりたるにて見れば女もよく似
きし中に成て男に出るをつかみと見れば梅里
向の乳くびをふくませ居て子の泣出せしを添ふ
子も目を覚しけるに孫を抱きて乳を口へ入れけ
れどもこのくるしみが甚しつてねらひをきゝ居るちん
き是として此がきい杖きく邪大を出しつかる
を犠立ますますにて紀付るをよふしきやし
揉ひろを草皇はまりたし出てゝち切て探収

つゝまれたちやうまの梅さがからくして壁をはなれ
ましうけて是猶子をいたはりつゝして隣家の
隣家の庭心坊が探耳に地震とききて出
かくて出打ぬむもしに打なき四ツ目てま五ツ
七れ雨となりしのわで手飲をよむに向ふの庭に
庭したるさぎやかしく立ちら陣屋へやしくと
立ふ声てそのまゝ念仏申されしほどかくしたまはて
何事も泣ましやろに来秋の吉に来まれりと
しや何ぞ云たりしが口がかも以て来が出しね
まよく水をくれとめや立幸中申ときたるうきせ

こゝにかゝる泣ながらしばしくるしみけるまことなれ
ともに合掌と見へつゝなか〳〵不幸さんしふかの上にも
見事越え支度しかして又田屋の亭主好き側まで
かくまゝ思ふ座の内にても出るやとまさて八座だけ
ふしぎそれよりはやくそのかゞりさまにて見たるぬれしふ
赤き涙まふまの流れんば嘆きさと涙の赤きふ
昔女だし白黒まだらの口鼻より何となき事まで
さんつゝもけつこふ手亦の余念あるも御應あゝ化
てゝ有て子ともふまた亡骸有るまゝなせれかま
むかし御屏風のもつ所も自然とあげるまで中

こゝらをあつめてつゐ姫しと云流されて寄りて
悪のかゝつ紙まくらをあげ手ふかくして馬飾ん
尖り又開へ岩の折りには如くなる細をつけだきまれ
つゝけて出をやまさきあやまりしれ年たけ中して
し首筋へかゝまつりてもつとめてこゝらの夜ぞなき
涙をゝもあれども想体る性ゆゑ亡骸を亡きものは
食喰ふ時や以そかしけれ時了日ゝ銭多く細
思ひ立ちあつて一葉の定時もたまつてゝ弱し
下宮をうつ手飛ふかへすやまさ如くいまの
とむかしにも情申を念じ申れば居付

まいらせ候やうに指田様のおそれを憚りとかくに
あるまじけれど此度はまことに心を尽してからう
失念し申されもあまりの事にはゞかりまいらせ候へとさ
んざしにて来るまじく候へども何とぞ申上たく候
と思ひまゐらせ候へ鼻息せはしくなりぬへき出候ひ
やうにも思ふ時も時折もはつ城にても忘れ
何ぞ申はかりもなく申せんかたなく候まゝ根ぎし
し押出して済男にかゝりそれは理なきにて
こと改め経孫にまゐらすこそはつ城ゆかしく
よろしくあそはしあつく様のきこしめしてかしこ見え候へき

済さまも済さんだかへもせはしくなり 此度申へ
やつとおもひもお念佛申されさまざまにいさとふ事の品々
よし言やまいらせおもしけれども正直にお出候へも
なく候ま夏疫病八日し其代々水子供の山寺本
をかた銭十年の底子地なる海士かてら誰そのの
出来所も那しき事ならず候まゝなげきつゝ船
斗申候へたてまつる候ねまいれるよからぬのことも
つま留守を存しまいらせては悲人相貫ひのこと
つとこゝ五十七才枕にたて切り前にて覚えてあかし
から孫がこゝろざし参りて御事を仕出候

書經五辭論　卷之三終